

た<sup>(88)</sup>。高値の貨幣には数字の80を表す「Π」を、低値の貨幣には数字の40を表す「M」を刻んだのである<sup>(89)</sup>。すなわち、「Π」の印は、クレオパトラによってその価値が保証されている青銅貨であることを証だといえる。故に、ドラ出土のこの青銅貨には、当時の彼女の主導権が見て取れるのである。

シュエンツェルも指摘する通り、貨幣の表面に同じ方向を向いた男女の肖像を刻ませるのは、プトレマイオス朝初期の貨幣の模倣であると思われる<sup>(90)</sup>。ただし、貨幣の図像におけるこのような手法には他にも先例が存在する。それは、第2章でも取り上げたクレオパトラ・テアである。彼女の貨幣のひとつに、共同統治者であった息子アンティオコス8世の前景にクレオパトラ・テアが描かれている<sup>(91)</sup>。ホワイトホーンは、ここにはクレオパトラ・テアによる彼に対する優位性が表れていると述べる<sup>(92)</sup>。更に、クレオパトラ・テアは、最初の夫であるアレクサンドロス1世バラスとの貨幣においても前景に描かれているのである<sup>(93)</sup>。クレオパトラが、このようにクレオパトラ・テアを意識していた証拠として、「生まれ変わった女神 (Θεά νεωτέρα)」の称号も挙げられる。この称号は、自らの統治暦における新たな治世元年と定め既存の統治暦との併用を始めた治世16年目にあたる前36年<sup>(94)</sup>にシリアで造幣された貨幣に刻まれた。ちなみに、クレオパトラ・テアは自身の息子であるアンティオコス8世を毒殺するのに失敗し逆に死ぬこととなったと伝えられている<sup>(95)</sup>。この点については、彼女を模倣したところで幸先が良いようには全く思われない。しかし、クレオパトラが彼女を模倣したのは、ローラーが述べるように、領土的な野心によるところが大きかったに違いない<sup>(96)</sup>。

以上の内容を踏まえた上で、時系列に沿って関連する主な出来事をまとめてみたい。クレオパトラは前36年アントニウスとともに冬のアンティオキアで過ごした頃、シリアにおいて造幣した自身の4ドラクマ銀貨において「生まれ変わった女神 (Θεά νεωτέρα)」という称号を名乗った<sup>(97)</sup>。更に同年、エジプト歴における治世16年目を新たな治世元年と定め、旧統治暦との併用を始める<sup>(98)</sup>。そして、前35年に自身をイシスとしてデンデラのハトホル神殿南壁にカエサリオンとともに刻ませた<sup>(99)</sup>。これらは全て、前34年に始まるアントニウスによるパルティア遠征と、そこから手に入る領土に期待してのことであったと思われる。しかし、アントニウスのパルティア遠征は惨敗に終わる。このことを人民に向けて明示することは、クレオパトラの王権を揺るがしかねない事態であった。故に、前34/33年にフェエニキアのドラで造幣されたと推定されるクレオパトラが前景に描かれたアントニウスとの青銅貨からも垣間見える通り<sup>(100)</sup>、当時彼女が主導権を握っていたアントニウスをして、対アルメニア戦の凱旋式を例外的にアレクサンドリアで開催させた<sup>(101)</sup>。そしてその際に、支配下に入る予定であったパルティアの王を連想させる称号の女性版として「諸王の女王 (REGINAE REGVM FILIORVM REGVM)」を授与されたのではなかろうか。アントニウスにしてみても、ポンペイウスの先例がある等、西方における自身にとってデメリットはなく、東方的な王権理念に沿うクレオパトラにしてみれば、王権の弱体化を阻止しその上逆境を好機に変え得るというメリットにさえ繋がっていたのである。

## おわりに

第1章では、クレオパトラが、プトレマイオス朝の伝統を踏まえつつ、エジプトの文化と積極的に関わろうとした様相をブキス・ステラに基づいて眺めた。そして、第2章では、クレオパトラ治世以前からのシンクレティズムによるイシス信仰を、ハイブリッド性を以て積極的に政治に活用した様子について考察した。また、彼女はエジプトにおいて女王や女神として扱われていたことが、イシス姿のレリーフ及び称号からも窺い知ることが出来たのではなかろうか。

かつて、プトレマイオス3世は、エジプト語による称号「プタハに愛されし者」を有していた<sup>(102)</sup>。プトレマイオス12世は上記の称号に加えて「イシスに愛されし者」も有しており、称号「プタハとイシスに愛されし者」はカエサリオンにも引き継がれた<sup>(103)</sup>。同じ称号はアウグストゥスにも引き継がれているという<sup>(104)</sup>。おそらく、これは、当該王朝初期から結びついていた下エジプトはメンフィスのプタハ神官団のみならず<sup>(105)</sup>、上エジプトのハトホル神殿内におけるイシス神殿に対し資金援助したことに関連していると考えられる<sup>(106)</sup>。ここにおいて注目すべきは、クレオパトラのエジプト語による称号が、「愛父女神」であり、彼女自身が女神として扱われている点である。プトレマイオス12世の治世に至るまでエジプトにおける反乱が絶えることはなかったが、その元となるような対立感情は主としてエジプト人エリート層の中にこそ存在したとされている<sup>(107)</sup>。つまり、クレオパトラはその治世において、拙稿で扱ったメンフィスのプタハ神官団への新たな称号授与や<sup>(108)</sup>、本稿第1章で扱ったヘルモンティスにおけるブキスの儀式への参加、そしてイシスとしてのハトホル神殿への奉獻等を通して、父プトレマイオス12世を含む当該王朝の歴代の王達が築いてきた上下エジプト人エリート層との繋がりを引き継ぐのみならず、より一層強めたと考えられるのである。このことが、彼女の王権の基盤であったとも言えるのではなかろうか<sup>(109)</sup>。

更に、本稿第3章で扱った称号「諸王の女王」は、元来エジプトやペルシアにおいて伝統的に用いられてきた称号「諸王の王」が、パルティアの王達によってローマに対抗する文脈で用いられ始め<sup>(110)</sup>、再びクレオパトラの主導により用いられたものであることを明らかにした。

ところで、エジプトとペルシアに共通するような王権理念の存在が見て取れる。すなわち、王は、例え自身が神ではないとしても神々の代理人として世界の秩序を守る役割があるため、例え戦争に負けても殺されるもしくは捕虜となることは避けねばならないというものである<sup>(111)</sup>。この、王が守るべき秩序とは、エジプトにおいてはマアトを指す<sup>(112)</sup>。スタンウィックによれば、当該王朝の王達の彫像にさえ、臣民に善行を施すために外敵を服従させ国土及びその治安を守るというファラオとしての最も古く倫理的な義務が表現されているという<sup>(113)</sup>。こうしたことに鑑みると、クレオパトラ治世史研究における大きな問題のひとつとされてきた、アクティウム海戦におけるクレオパトラの突然の戦線離脱や<sup>(114)</sup>、彼女が自殺した理由を解明する糸口となるように思われる。本稿でみてきたように、クレオパトラ治世にはハイブリッド性があることが明らかとなったが、その根幹にはエジプト的な理念もあったのではなかろうか。

## 註

- (1) 以後、本稿では「クレオパトラ7世」を「クレオパトラ」と表記する。
- (2) Plut., *Ant.*, 27.
- (3) Plut., *Ant.*, 27.
- (4) E. Otto, “Buchis”, *Lexikon der Ägyptologie*, Bd. 1, 1975, S. 874f.
- (5) R. Mond, O. H. Myers, *The Bucheum*, vol. 1, London, 1934, pp. 11-23.
- (6) ただし、プトレマイオス7世のように、自ら新たなブキスを任命したと記されている場合もあり、彼がテーベまでは赴いた可能性も高いとされている (*ibid.*, p. 12f.)。
- (7) コペンハーゲンのニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館所蔵。縦90cm×横57cmの砂岩製 (R. S. Bianchi (et al.), *Cleopatra's Egypt: Age of the Ptolemies*, Brooklyn, 1988, p. 213f.)。
- (8) Dio, li.16.5. 更に、アウグストゥスの治世2枚目のブキス・ステラにも彼自身が新たなブキスを任命したり、儀式に参加したという記述は見受けられない。ただ、彼の治世に新たな雄牛が現れたことのみ言及されている (Mond, Myers, *op. cit.*, vol. 2, p. 32f.)。
- (9) Mond, Myers, *op. cit.*, vol. 1, p. 12.
- (10) Mond, Myers, *op. cit.*, vol. 2, pp. 11-13.
- (11) 翻訳にあたっては、フェアマンの訳を参照した (H. W. Fairman, “13. Stela of Augustus”, in Mond, Myers, *op. cit.*, vol. 2, p. 32)。加えて、ジョーンズの解説も参考にした (P. J. Jones, *Cleopatra: A Sourcebook*, Oklahoma, 2006, pp. 35-38)。なお、称号は独自に「 」で囲った。また、( )内はステラ中における行数を表し、○は中の王族名が欠損したカルトウーシュであり、[……]は欠損箇所を表し、[ ]内の語句は訳者による補足である。
- (12) Jones, *op. cit.*, p. 37.
- (13) Bianchi (et al.), *op. cit.*, p. 214; J. Tyldesley, *Cleopatra: Last Queen of Egypt*, London, 2008, p. 42.
- (14) 一方で、プトレマイオス8世とクレオパトラ2世がエドフへ赴き神殿に奉納したり、プトレマイオス9世がエレファンティネで犠牲を捧げたりする等、上エジプトへ赴きブキス以外の儀式へは参加したという見解もある (G. Hölbl, T. Saavedra (trans.), *A History of the Ptolemaic Empire*, London, 2001, pp. 205f. and 263-65)。
- (15) M. フォス、田村明子 (訳) 『知っていそうで知らなかったクレオパトラ』集英社、2000年、77頁。
- (16) R. A. Fazzini, “Buchis Stela”, in *Cleopatra's Egypt: Age of the Ptolemies*, Brooklyn, 1988, p. 214.
- (17) D. W. Roller, *Cleopatra: A Biography*, Oxford, 2010, p. 53.
- (18) S.-A. Ashton, *Cleopatra and Egypt*, Oxford, 2008, p. 51.
- (19) S. M. Burstein, *The Reign of Cleopatra*, Oklahoma, 2004, p. 16.
- (20) E. S. Gruen, “Cleopatra in Rome: Facts and Fantasies”, in M. M. Miles (ed.), *Cleopatra: A Sphinx Revisited*, Berkeley, 2011, p. 42.
- (21) J. Samson, *Nefertiti and Cleopatra: Queen-Monarchs of Ancient Egypt*, London, 1987, p. 115.
- (22) 金澤良樹「ラゴス朝治下における被支配民エジプト人の抵抗運動 (古代における支配と被支配の諸形態〈特集〉)」『歴史評論』第403号、1983年、21-22頁。
- (23) AEIN1681, l. 10.
- (24) A. M. Burnett, M. Amandry, P. P. Ripollès, *Roman Provincial Coinage*, vol. 1, London, 1992 (以下、*RPC*, vol. 1と略す), p. 602, nos. 4094-96.
- (25) ハトシェプストやネフェルトイティのように、クレオパトラは「二国の女主」の称号を持っており、これは彼女が「王」として記録されたことを意味する (Samson, *op. cit.*, p. 107)。(エジプト人) 神官から「上下エジプト王」として特別な評価を与えられた王にはプトレマイオス2世やクレオパトラ (7世) が挙げられる (W. Huß, *Der makedonische König und die ägyptischen Priester: Studien zur Geschichte des*

- ptolemaïschen Ägypten*, Eurasburg, 1994, S. 101f.)。
- (26) J. Whitehorne, *Cleopatra*, London, 1994, pp. 149-63; 長谷川岳男「ヘレニズム期の王妃達はいかに描かれたか—西洋古代における王権とジェンダー研究序説」『歴史学研究』第704号、1997年、12-23頁、20頁。
- (27) Plut., *Ant.*, 26.
- (28) Plut., *Ant.*, 54.
- (29) T. T. Tinh, “Isis”, *LIMC*, V.1, 1990, pp. 793-96.
- (30) E. D. Carney, *Arsinoë of Egypt and Macedon: A Royal Life*, Oxford, 2013, p. 108; Tyldesley, *op. cit.*, p. 114.
- (31) G. W. Goudchaux, “Cleopatra’s Subtle Religious Strategy”, in S. Walker, P. Higgs (eds.), *Cleopatra of Egypt: From History to Myth*, London, 2001, p. 130f.
- (32) Whitehorne, *op. cit.*, p. 193.
- (33) C. G. シュエンツェル、北野徹 (訳) 『クレオパトラ』白水社、2007年、100-1頁。
- (34) Hölbl, *op. cit.*, p. 293.
- (35) *Ibid.*, p. 293. なお、イシスが地中海世界で普遍的な神として信仰されていたことについては、大戸千之「ヘレニズム時代における文化の伝播と受容—地中海東部諸地域におけるエジプト神信仰について」歴史学研究会編『古代地中海世界の統一と変容』青木書店、2000年、111-14頁を参照のこと。
- (36) Tyldesley, *op. cit.*, p. 115.
- (37) メトロポリタン美術館所蔵、高さ61.8 cm、大理石製 (Walker, Higgs (eds.), *op. cit.*, p. 164)。
- (38) Ashton, *op. cit.*, p. 92.
- (39) Ashton, *op. cit.*, pp. 92-99; J. Bingen, R. S. Bagnall (eds.), *Hellenistic Egypt: Monarchy, Society, Economy, Culture*, California, 2007, p. 72f.; M. Chauveau, D. Lorton (trans.), *Cleopatra: the Myth*, Ithaca/ London, 2002, p. 79; Samson, *op. cit.*, p. 119; Tyldesley, *op. cit.*, p. 6.
- (40) 以下のまとめについてはアシュトンを参照した (Ashton, *op. cit.*, pp. 92-99)。
- (41) J. Ray, “Cleopatra in the Temples of Upper Egypt: The Evidence of Dendera and Armant”, in S. Walker, S.-A. Ashton (eds.), *Cleopatra Reassessed*, London, 2003, p. 10.
- (42) Bingen, Bagnall (eds.), *op. cit.*, p. 73.
- (43) S. Cauville, *Dendara I*, Leuven, 1998, pp. 168, 179, 200, 210.
- (44) D. Arnold, *Temples of the Last Pharaohs*, Oxford, 1999, p. 221.
- (45) Tyldesley, *op. cit.*, p. 122.
- (46) *Ibid.*, p. 122.
- (47) *Ibid.*, p. 124.
- (48) *Ibid.*, p. 122.
- (49) *RPC*, vol. 1, p. 259, no. 1245.
- (50) A. Houghton, C. Lorber, O. Hoover, *Seleucid Coins: A Comprehensive Catalogue, Part II*, New York, 2008, no. 2274.
- (51) *SNG*, VII, 1469-71.
- (52) A. Meadows, S.-A. Ashton, “Bronze Coin of Cleopatra VII”, in Walker, Higgs (eds.), *op. cit.* (以下、Meadows, Ashton, “Bronze Coin”と略す), p. 178.
- (53) *RPC*, vol. 1, p. 259, no. 1245には書かれていないが、Meadows, Ashton, “Bronze Coin”, p. 178. においてステフェネと説明されている冠の形状と酷似している。
- (54) Ganszynicec, “Kranz”, *RE*, XI2, 1922, Sp. 1589.
- (55) Tyldesley, *op. cit.*, p. 118.
- (56) A. Meadows, S.-A. Ashton, “Gold Octadrachms from the Reign of Ptolemy V Epiphanes”, in Walker, Higgs (eds.), *op. cit.* (以下 Meadows, Ashton, “Gold Octadrachms”と略す), p. 84; cf. E. L. Rocca, *L’Età d’oro di Cleopatra:*

- Indagine sulla Tazza Farnese*, Rome, 1984, p. 35.
- (57) Meadows, Ashton, “Gold Octadrachms”, p. 84.
- (58) *RPC*, vol. 1, p. 259, no. 1245.
- (59) Meadows, Ashton, “Gold Octadrachms”, p. 84.
- (60) R. T. Witt, *Isis in the Ancient World*, Baltimore/ London, 1971, pp. 83, 109.
- (61) シュエンツェル、前掲書、94頁。
- (62) Roller, *op. cit.*, p. 89.
- (63) 「この〔アルメニア征服〕後、アントニウスはアレクサンドリア市民達を祝宴に招き、人々の前で、クレオパトラと彼女の子供達を彼の隣に座らせた。そして、一連の演説をして、彼女が諸王の女王(βασιλίδα βασιλέων)、カエサリオンと呼ばれたプトレマイオスが諸王の王と呼ばれるよう人々に命じたのである。」(Dio, xlix.41.1)。一方、プルタルコスは、「諸王の女王」について言及しておらず、この時アントニウスは、クレオパトラをエジプト、キプロス、リビア、コイレ・シリアの女王とし、カエサリオンをクレオパトラの共同統治者と宣言し、クレオパトラとアントニウスとの間に生まれた息子達に「諸王の王」の称号を与えたと記している(Plut., *Ant.*, 54)。ただし、本文にも示した通り、貨幣の銘文から「諸王の女王」の称号が実在したことは裏付けられる。
- (64) M. H. Crawford, *Roman Republican Coinage*, vol. 1, Cambridge, 1974 (以下、*RRC*と略す), p. 539, n. 543.1 (pl. LXIV.13)。この称号の直訳としては、意味合いとしてはほぼ同じであると思われるが厳密には多々ある。例えば、「諸王および王たる息子達の女王」が挙げられる(浅香正『クレオパトラとその時代—ローマ共和政の崩壊』創元社、1985年、161頁)。「その息子達が王である諸王の女王」という同称号は、クレオパトラの子供達に対する優位性を示すものとの解釈もなされた(A. ゴールズワーシー、阪本浩(訳)『アントニウスとクレオパトラ』白水社、2016年、下巻、127頁)。
- (65) Dio, xlix.41.2.
- (66) シュエンツェル、前掲書、62-63頁。
- (67) E. Grapow, *Wörterbuch der Ägyptischen Sprache*, II, Berlin, 1953, 328, 6-7; cf. G. Griffiths, “βασιλεύς βασιλέων: Remarks on the History of a Title”, *CP*, 48, 1953, p. 150f.
- (68) S.-A. Ashton, *The Last Queens of Egypt*, London, 2003, pp. 97-114.
- (69) Griffiths, *op. cit.*, p. 148; Hölbl, *op. cit.*, p. 291f.; cf. M. R. Shayegan, *Arsacids and Sasanians: Political Ideology in Post-Hellenistic and Late Antique Persia*, Cambridge, 2011, p. 45.
- (70) Plut., *Demetr.*, 25.3; cf. E. Fredricksmeier, “Alexander the Great and the Kingship of Asia”, in A. B. Bosworth, E. J. Baynham (eds.), *Alexander the Great in Fact and Fiction*, Oxford, 2000, p. 162.
- (71) Just., *Epit.*, 12. 3. 8.
- (72) Arr., *Anab.*, ii.14; Plut., *Alex.*, 33.
- (73) Cf. Shayegan, *op. cit.*, p. 45.
- (74) *Ibid.*, p. 228.
- (75) *Ibid.*, p. 228f.
- (76) *Ibid.*, pp. 328-30.
- (77) Cf. Dio, xxxvii.6.2; Plut., *Pomp.*, 38.2.
- (78) Shayegan, *op. cit.*, p. 327f.
- (79) しかし、結果的には、「アントニウス自身は諸王の王ではなかった。何故なら、彼は東方の地域を治めるよりもっと大きな野望を抱いていたからである。アントニウスはローマ帝国全体を支配し、傍らのクレオパトラは妻として東方を治めるという目的を持っていたのである」(Samson, *op. cit.*, p. 137f.) というみかたへとつながった。
- (80) D. J. Thompson, “Cleopatra VII: The Queen in Egypt”, in Walker, Ashton (eds.), *op. cit.*, p. 31. なお、後者の称

号における「祖国」が、エジプトを指すのかギリシアを指すかで見解が分かれている。これについての詳細は Bingen, Bughall (eds.), *op. cit.*, pp.57-62を参照のこと。

- (81) クレオパトラは、下エジプトの中心都市メンフィスのプタハ神官団において当時最有力家系となりつつあった家柄の女性に、「プタハの偉大なる妻 (*ḥmt-ʿst-n-Pth*)」の称号を与えている。これは、称号を受けた女性の母親の葬祭用ステラである BM EA 184でのみ確認される目新しい称号であるものの、テーベで伝統あるアムン神妻と対を成すものと考えられる（拙稿「プトレマイオス朝最末期におけるメンフィスのプタハ神官団—BM EA 184の再考察」『史友』、第48号、2016年、26頁）。ここにも、彼女の称号への関心の強さが窺える。
- (82) Dio, xlix.41.3; Plut., *Ant.*, 54.
- (83) *RPC*, vol. 1, p. 661, no. 4752; シュエンツェル、前掲書、97頁。
- (84) *RPC*, vol. 1, p. 377, no. 2202, p. 601, no. 4091.
- (85) ドラの貨幣においては、クレオパトラ治世以前にも以後にも、テュケーの図像が多く用いられた（Y. Meshorer, “The Coins of the Mint of Dora”, in E. Stern (et.al., eds.), *Excavations at Dor, Final Report, Qedem Reports 1A: Areas A and C: Introduction and Stratigraphy*, Jerusalem, 1995, pp. 355-65）。また、（テュケーと同一視された）フォルトゥーナは、当時の地中海において「航海のイシス (*Isis Navigans*)」と結び付けられていた（Goudchaux, *op. cit.*, p. 131）。
- (86) *RPC*, vol. 1, p. 661, no. 4752.
- (87) M. H. Crawford, *Coinage and Money under the Roman Republic: Italy and the Mediterranean Economy*, Berkeley/ Los Angeles, 1985.
- (88) Meadows, Ashton, “Bronze Coin”, p. 178. そもそも、当該王朝初期には大量の青銅貨が造幣されていたが、徐々に減少しプトレマイオス10世の時代には既に、アレクサンドリアでは造幣されなくなっていた。しかし、クレオパトラ治世に、首都における青銅貨の造幣を再開した。
- (89) Meadows, Ashton, “Bronze Coin”, p. 178.
- (90) シュエンツェル、前掲書、96-97頁。
- (91) E.g. *SNG*, I-1, 44, I-2, 436-37; cf. A. Meadows, “Silver Tetradrachm of Cleopatra Thea and Antioch VIII”, in Walker, Higgs (eds.), *op. cit.*, p. 87; Rocca, *op. cit.*, p. 39.
- (92) Whitehorne, *op. cit.*, p. 163.
- (93) Rocca, *op. cit.*, p. 38; Meadows, *op. cit.*, p. 87.
- (94) Hölbl, *op. cit.*, p. 242.
- (95) Just., *Epit.*, xxxix. 2. 7-8.
- (96) Roller, *op. cit.*, p. 182.
- (97) *RPC*, vol. 1, p. 602, nos. 4094-96.
- (98) Hölbl, *op. cit.*, p. 242.
- (99) Ray, *op. cit.*, p. 10.
- (100) *RPC*, vol. 1, p. 661, no. 4752.
- (101) ローマの凱旋式は、元首政期に至っても都市ローマ内を行進する形式で挙行されるのが常であった（E. Künzl, *Der römische Triumph*, München, 1988, S. 30-44）。
- (102) J. Tait, “Cleopatra by Name”, in Walker, Ashton (eds.), *op. cit.*, p. 3.
- (103) Tyldesley, *op. cit.*, p. 268.
- (104) Witt, *op. cit.*, p. 223.
- (105) J. G. Manning, *The Last Pharaohs: Egypt Under the Ptolemies, 305-30BC*, Princeton, 2010, p. 92; D. J. Thompson, *Memphis Under the Ptolemies*, 2<sup>nd</sup> ed., Princeton, 2012, p. 99; Huß, a. a. O., S. 14-17.
- (106) ただし、プトレマイオス12世以前にもハトホル神官団には、当該王朝と結びつき叛徒と戦った前例があ

- る（金澤、前掲論文、22頁）。
- (107) 金澤良樹「ラゴス朝後期のギリシア人とエジプト人」『アジア諸民族における社会と文化—岡本敬二先生退官記念論集』、1984年、585頁。
- (108) 前掲拙稿、26頁。
- (109) 「[王位]のための[祭壇]が獲得できれば、それと同時に土着の人々の大部分の政治的姿勢は、自ずと肯定的又は中立の形をとるようになるであろう。すなわち、神官が依然として政治的に強い影響力を保持していたことは疑いない」(Huß, a. a. O., S. 13f.)。
- (110) Shayegan, *op. cit.*, pp. 328-30.
- (111) イッソスの戦いにおいてダレイオスが撤退したのも、ペルシア王が体現していた神と人間の世界の重要なつながりが、王の死によって絶たれるべきではないという思想に基づくものとされている (G. M. Rogers, *Alexander: The Ambiguity of Greatness*, New York, 2004, p. 74)。
- (112) E. オットー、吉成薫（訳）『エジプト文化入門』六興出版、1992年、104-23頁; Manning, *op. cit.*, pp. 92, 169-71; Tyldesley, *op. cit.*, p. 111.
- (113) P. E. Stanwick, *Portraits of the Ptolemies: Greek Kings as Egyptian Pharaohs*, Texas, 2002, pp. 6-8.
- (114) Plut., *Ant.*, 66.